

首里城内の門

首里城は内郭(内側城郭)と外郭(外側城郭)に大きく分けられ、内郭は一五世紀初期に、外郭は一六世紀中期に完成しています。

城壁に創建された門の中で、瑞泉門、漏刻門、右掖門、美福門は内郭に位置し、歓会門、久慶門、継世門、木曳門は外郭に位置しています。

③ 歓会門(かんかいもん)

「歓会」とは歓迎するという意味である。往時、首里城へは中国皇帝の使者「冊封使(さつぽうし)」が招かれたが、こうした人々を歓迎するという意味でこの名が付けられた。別名「あまへ御門(あまへうじょう)」ともいう。「あまへ」とは琉球の古語で、「喜ばしいこと」を意味する。創建は一四七七〜一五〇〇年頃(尚真王代)で、沖繩戦で焼失したが、一九七四年(昭和四九)に復元された。門は石のアーチ状の城門の上に木造の櫓(ぐら)が載せてある。



▲歓会門

④ 瑞泉門(ずいせんもん)

「瑞泉」とは「立派な、めでたい泉」という意味である。門の左手右側にある湧水が「龍樋(りゅうひ)」と呼ばれ、それにちなんでこのように名付けられた。別名「ひかわ御門(うじょう)」ともいう。創建は一四七〇年頃で沖繩戦で焼失したが、一九九二年(平成四)に復元された。門の両脇には「対の石獅子(いしじ)」が並んでいる。門は双壁の門の上に直接櫓がのっている。櫓の中央の「瑞泉」という扁額(へんがく)が琉球独特の持ち味を出している。



▲瑞泉門

⑤ 漏刻門(ろうこくもん)

「漏刻」とは中国語で「水時計」という意味である。別名「かこ居せ御門(かこいせうじょう)」ともいう。創建は一五世紀頃である。門の上の櫓に水槽を設置し、水が漏れる量で時間を計ったといわれている。時刻を測定する

係の役人がここで太鼓を叩き、それを聞いた別の役人が東(あがり)のアザナと西(いり)のアザナおよび右掖門(うえきもん)で同時に大鐘(おおかね)を打ち鳴らし、城内および城外に時刻を知らせた。



▲漏刻門

⑥ 広福門(こうふくもん)

「広福」とは、「福を行き渡らせぬ」という意味である。「広福門」は別名「長御門(ながつじょう)」という。建物そのものが門の機能をもっており、この形式も首里城の城門の特徴である。創建年は不明である。明治末期頃に撤去され、一九九一年(平成四)に復元された。王府時代、この建物には神社仏閣を管理する「寺社座(じしゃざ)」と、土族の財産をめぐる争いを調停する「大与座(おおくみざ)」という役所が置かれていた。



▲広福門

⑦ 奉神門(ほうしんもん)

「神をうやまう門」という意味で、首里城正殿のある「御庭(うな)」へ入る最後の門である。一五六二年には石造欄干(せきぞうらんかん)が完成したという記録があることから創建はそれ以前である。建物は明治末期頃に撤去されたが、一九九二年(平成四)に外観が復元された。別名「君誇御門(きみほこりうじょう)」ともいう。向かって左側(北側)は「納殿(なでん)」で薬類・茶・煙草等の出納を取り扱う部屋、右側(南側)は「君誇(きみほこり)」で城内の儀式のとき等に使われた。三つの門のうち中央は国王や中国からの冊封使(さつぽうし)等限られた身分の高い人だけが通れる門である。それ以外の役人は両側の門から入城した。



▲奉神門

⑧ 右掖門(うえきもん)

「右掖門」は眼下に見える歓会門、久慶門(きゅうけいもん)から淑順門(しゆくじゆんもん)へ直接通じている門で、往時は淑順門から御内原(おうちばら)へ入った。別名「寄内御門(よすふいちゅうじょう)」ともいい、創建は一五世紀頃と伝えられる。沖繩戦で焼失したが、一九九二年(平成四)に櫓から下の城壁部が復元され、二〇〇〇年(平成一二)に櫓が復元された。



▲右掖門

⑨ 淑順門(しゆくじゆんもん)

「淑順門」は国王やその家族が暮らす御内原と呼ばれる場所への表門で、琉球語の古称は「みもの御門(うじょう)」。「うなか御門」である。建物の創建年は不明とされており、二〇一〇年(平成二二)に復元された。門の造りは櫓門形式・入母屋造・本瓦葺となっている。



▲淑順門

⑩ 久慶門(きゅうけいもん)

「久慶門」は別名「ほこり御門」ともいう。歓会門が正門であるのに対し、こは通用門で主に女性が利用したといわれている。

「久慶門」は別名「ほこり御門」ともいう。歓会門が正門であるのに対し、こは通用門で主に女性が利用したといわれている。国王が寺院を参詣(さんけい)したり、浦添から以北の地方へ行幸(ぎょこう)するとき等に使用した門であった。創建は一四七七〜一五二六年【尚真王代(しょうしんおう)】といわれ、一九八三年(昭和五八)に復元された。門の左手に「寒水川樋川(すんがーひーじゃー)」と呼ばれる湧水がある。

⑪ 木曳門(こびきもん)

この門は、首里城の修復工事のときにのみ、資材の搬入口として使用された門である。普段は石積によって封鎖され、数年に一度といった頻度で行われる工事のときだけそれを撤去して使用した。



▲木曳門

⑫ 継世門(けいせいもん)

継世門は首里城の東側の門で、いわば裏門である。この継世門は外郭の門で、別名「すえつき御門」という。門の両側には「基の石碑」が建てられていて、猛威を振るっていた倭寇(わこく)に備え、一五四四年に建てられたという主旨のことが書かれていた。門は一九九八年(平成一〇)に復元された。



▲継世門

⑬ 美福門(びふくもん)

継世門をさらに進むと、石段を登りつめたところに美福門がある。継世門が出来るまでは、これが首里城の東門であった。城壁に直接木造の櫓を載せた構造で入母屋造・本瓦葺である。門前には「対の石獅子」が置かれていた。赤田に面していたので「赤田御門」といわれていたが、継世門のちに赤田御門と呼ばれるようになってからは、この門は「シーサー御門」と呼ばれていた。

※美福門は未開園区域です

⑭ 白銀門(はくぎんもん)

東のアザナの下に、石垣で小さく取り囲まれた場所があるが、ここはかつて、寝廟殿が建っていたところである。寝廟殿は、国王死去のとき靈柩を安置した。寝廟殿への門が、白銀門である。この門は国王だけが出入りし、南側の小さな門が国王以外の人々の通用門となっていた。白銀門は全部石造で、中央にアーチ門を開き、その上に入母屋造の屋根を載せていた。屋根の勾配は緩やかで、大棟や軒先の反り具合は石造物としては、精妙な造りであったという。国宝であったが、沖繩戦で破壊された。

※白銀門は未開園区域で復元していません

⑮ 左掖門(さえきもん)

正殿を境に東側一帯は「御内原」とよばれる「奥」の世界で、国王やその親族のプライベートな空間だった。御内原の中心といえる建物が王妃の居室である黄金御殿(くがにうどうん)で、左掖門はその一階にあり、「くらしん御門(クラシン)」は暗闇の意味と呼ばれた。創建年は不明である。

※左掖門は未開園区域で復元していません

【参考資料】

- ・首里城公園HP施設案内の頁
- ・「首里城入門」首里城研究グループ編
- ・のぎ社発行



▲久慶門